「朝の読書」このままでよいのか

別府大学非常勤講師
得松　昭行

子どもの読書の問題を抜きにして開発プログラムに取り組むことはできないと考え、全国「朝の読書」連絡会会長・栗原勝氏に講演『子どもの学ぶ力を伸ばす「朝の読書」』をしてもらった。

第53回学校読書調査の結果を毎日新聞（2007年10月26日朝刊17面）は「全校読書小・中学で浸透」「生徒の８割好評価」「低学年ほど効果高く」の大きな見出しで報じている。「本に親しむよう、毎朝10分程度、児童・生徒が読書する時間を設ける動きが全国的に広がっている」効果について、児童・生徒のアンケート調査によれば「本を読むことが増えた小学生50％、中学生52％」「本が読めて楽しい小学生37％、中学生32％」「静かに過ごせる小学生20％、中学生25％」などとある。

雑誌「学校図書館」（2007年11月号）では同読書調査について４ページをさいて「広がる全校一斉読書　―小・中学校で約９割―」「学校図書館に魅力的な図書を　―全校一斉読書の充実に向けて―」詳しく報告・解説している。しかし、「朝の読書」の四原則の意味を十分検討しないまま、マンネリ化しているのではないか、との声もよく聞く。

また、林　公著『子どもの学ぶ力を伸ばす「朝の読書」　自ら考え、自ら学ぶ意欲を育てる』（メディアパル刊　2006年３月30日初版第一刷）や栗原氏の講演や資料から、「朝の読書」について多くのことを学びながら、さて学校現場では「朝の読書」など全校一斉読書はどのように進められているのだろうか。「朝の読書」の４原則の意味をきちんと理解し、共通認識にたって実践しているかどうか、見直していただきたくこの項をおこすことにした。

「朝の読書」の真の目的は？　林　公氏の著書に学ぼう

残念ながら、子どもたちをめぐる事態は深刻の度を増すばかりである。この深刻で複雑な社会を生き抜いていくために、子どもたちに身につけてほしい、覚えてほしいことがある。子ども自らがそのような力をつけてもらいたいという願いから「朝の読書」を始めたといっても過言ではない。生きていく上で必要不可欠な力、子どもたちの悩みや願いに応えるために「朝の読書」活動を始めた。

「朝の読書」がもたらすもの

＊自主性、主体性を身につける。好きな本を自分で選び、読むことにより、自分の考え方、生き方を変えていく。
＊興味・関心があり、読みたいと思う本を読むことにより、自分にとって必要なものを学ぶ。
＊自分の力に応じて読むことにより、「朝の読書」は一人ひとりに合った学びの場になる。
＊自分の好きな本は、個性に合った本であり、進んで読むことにより、自分を見つめ、自分を知ることができる。そして個性を伸ばす。
＊多くの人の体験や考えを知り、自分の生き方を考えることができる。
＊基本的習慣の崩れを正す。
＊毎日の努力が確実に自分の力を伸ばすことを実感する。初めはしぶしぶ読んでいた子もみんなが読書

に熱中している雰囲気になじんでだんだん読むようになる。
＊毎日短時間でも続けることにより習慣の力の偉大さを知る。
＊静かになり、落ち着き、心の休まる時間をつくる。
＊友達が読んでいる姿や読んでいる本を知ることにより、友達との関係をより深く、豊かなものにする。
＊いろいろな本に出会い、読むことにより、どの子でも成長できると確信するようになる。
＊みんなでやることにより、静かで落ち着き、読書に集中して一日が始まる。毎日続けることにより一定の成果が現れ、学校は変わっていく。

「朝の読書」四原則をしっかりふまえて

１　みんなでやる　　全校一斉に、児童・生徒も教師もいっしょに読書をする

＊短時間の読書の時間を設けることは、全校一斉に取り組むのに最適のものである。
＊全校が大きな一歩を踏み出し、続けることに意義がある。
＊公平で、一人ひとりが独立して、みんなが主体的に参加できる。
＊児童・生徒全員に公平に責任を持つ。
＊誰が取り組んでも差が生じない。
＊教師の苦手も得意も関係なく、みんなで取り組むことができる。
＊みんなが毎朝読んでいるから、いつの間にか読まない子も読むようになる。
＊友達同士によい影響を与え、読書を広げることができる。
＊静かで集中した雰囲気は授業へ好影響を与える。無言の教育力といってもよい。

２　毎日やる　　10分間でも、15分間でも毎日続ける

＊毎日やることで読むことに慣れる、習慣化することができる。
＊毎日繰り返して読むうちに充実感を味わい、継続力がつく。
＊読書は成長に欠かせない栄養素。毎日与えなければ意味がない。
＊１日に10分間でも１週間には50分間。１学期、１年と積み重ねると大きな時間になる。
＊毎朝続けて読んでいれば、今まで読めなかった本も読めるようになる。
＊毎朝みんなで励ましあい、影響しあってって読むと効果は倍増する。

３　好きな本でよい　　自分が読みたい、好きな本を読む

＊自分の好きな本、読みたい本をまず読むことを読書の入口として、読み続けるように励ます。
＊知りたい、学びたいと思う本（興味・関心のある本）を読む。
（今までは強制され、読まされることが多く、読書嫌いをつくっていたことを反省して）
＊一人ひとり好き嫌い、興味の持ち方が違うという当たり前のことを大事にする。
＊本を選べない子ども、好きな本が分からない子どもに徐々に好きな本が選べるように援助する。
＊自分の隠れた能力や可能性に気づくように声をかける。
＊教師が感動した本、夢中になって読んだ本などを紹介する。
＊子供同士が「この本おもしろかったよ」をリストにして紹介したり、朝の会などでコメントしたりする。

＊読書は変わっていくという信頼の目で子どもの読書を見守る。読書が習慣化した子どもはより質の高い本、より広い分野の本を読むようになる。

４　ただ読むだけ　　好きな本をただ読むことだけに集中する

＊短時間であっても本の世界に没頭する。それを繰り返すことにより、感性を養い、希望をふくらませる。
＊感動こそ成長のもとである。感動の実感を大切に。初めに感動ありきである。
＊感動したものを生活に生かすことができたらすばらしい。
＊読むこと自体に楽しみと喜びを持つようにすることにより長続きする。
＊強制でないから毎日の繰り返しも苦にならない。

コミュニケーションの手段としての「朝の読書」

＊「朝の読書」では、言葉の理解を一律に多人数に強制することをやめ、子どもの数だけあり得る理解の道を切り拓いてやれるよう努めていきたい。
＊今まで分からなかったことが分かった時そばにいる教師がいっしょに手放しで喜んでくれたら、きっとその子の中に確かな何かが生まれるはずだ。
＊きわめて単純に個人的活動として考えられていた読書を、「朝の読書」を人と人とのコミュニケーションを豊かなものにする手段として捉え直そう。
＊学校生活をちょっと振り返ってみても、友達（他の人）の話を聞く機会が少ない。他の人に自分の意見を述べる機会も読書する機会も少ない。自分が書いたものを他の人に読んでもらう機会も少ない。これら「少ない」「ない」学校生活の実状の下では言葉による表現力が育つはずがない。
＊子どもの心の琴線に触れ、感動を誘うような話。子どもの悩みに直接答えるような話。日常生活を楽しくするような話など、聞きたくなるような話が多く交わせるようにしたい。
＊質問に答えさせる、何かを言わされるのでなく、自分から話したくなるような話、どうしても聞いてほしくなるような話をする機会を増やすように努める。そしてそれらを聞いてくれる、受け止めてくれる人が周囲にいることが大切。
＊自分の読みたい本が自由に読める時間が日常生活の中できちんと持てるようにはたらきかける。
＊自分が書きたいことを書いたら、喜んで読んでくれて、時にほめてくれたり励ましてくれたり、適切なアドバイスをしてくれるような人がいる。

毎朝の小さな喜びを大切に

毎朝、みんなで好きな本を読むだけを繰り返していく中で、読まなかった子、読めなかった子に読書の喜びを感得させていく。読書する喜びを共有する雰囲気が学級に生まれてくるようにはたらきかけることが大切だ。

みんなが集中して読む。それが毎日積み重なっていく。いろいろなことを知ることができる。いろいろなことを感じることができる。本っておもしろい。読書は楽しい。子どもたちの小さな喜びの積み重ねを大切にしていこう。そしてその輪を広げていこう。